

地域における博物館・図書館・文書館の連携と各機関の役割

佐藤 亮太

MLA 連携とは、図書館、文書館、博物館(ここでは美術館も含む)が、3 機関の共通性と異質性を相互に生かすための協力体制として捉えられている。欧米では資料のデジタル化プロジェクトを中心に連携が促進された一方で、展示や講座等の連携も盛んに行われている。

日本においては「地域の連携事項は古くから存在していた」とされるが連携が進んでいるとはいえない。日本における国レベルの連携は、各館がもつ資料をそれぞれデジタル化し、それを統一する、という意識の下に考えられている。しかし、地域レベルにおいてそれが実現できるか、また各館がどのような役割を担うのかについては明確になっていない。

本研究の目的は、地域における MLA 連携の実態を明らかにし、図書館、博物館、文書館の各館が連携についてどのような役割を果たしているかについて考察することにある。資料のデジタル化やメタデータの統一、連携している業務、資料の住み分けについての質問事項を作成し、聞き取り調査を行った。調査対象は、寒川総合図書館・寒川文書館、戸田市立図書館・郷土博物館、入間市図書館と、入間市博物館 ALIT、芳賀町総合情報館とした。

調査の結果、各機関の特徴を生かした連携方法が採られていることが明らかとなった。どの機関も予算不足や人手不足が問題となっており、新規にデジタルアーカイブズを作成する連携は困難である。メタデータの統一も、不可能ではないが統一して資料を検索する必要はないという意見が多く聞かれた。一方で、レファレンスや展示などによる連携は盛んに行われており、それぞれの通常業務を延長した形で連携が行われている傾向が強い。

文書館や博物館は、その集積された地域資料と専門的知識から、図書館が補いきれない部分のレファレンスや地域サービスを担当している。一方で図書館は、その浸透した一般的な認知と、資料に関する質問が日常的に行われていることから、最も地域住民からの質問を受け付けやすい。したがって、博物館と文書館は地域に関する情報を補完する役割を、図書館は地域に関する情報を求める地域住民を他機関へ誘導する“質問の窓口”あるいは“質問の入り口”としての役割を果たしていると言える。

また、各機関が扱う資料の違いが連携を困難なものとしているが、この違いを各機関の特徴としてとらえ、連携の際に各機関が資することのできる“強み”として考えることが重要である。さらに、図書館、文書館、博物館で社会的認知と規模に差異がみられ、それが連携の障害となっていることが課題として挙げられる。

地域における図書館・博物館・文書館の連携は、少ない人的資源や予算の問題、各館のできないことを補うために、各機関の特徴や長所を持ち寄って、利用者の要求に応える新たな協力関係である。それを達成するためには、地域内で連携に対する共通認識を持つこと、職員同士の相互理解に努めることが必要不可欠なものとなるのではないかと。

(指導教員 白井哲哉)